

エディトリアル

川崎市立多摩病院救急災害医療センター 副センター長 田中 拓

はじめに、災害によって、親しい人や大切な思いを失ってしまった多くの方に、心からお悔やみを申し上げます。

多くの、それでも前を向いて歩いている、笑顔を忘れない方に、心から敬意と声援を送ります。

日本は自然災害の多い国である。昔から繰り返し災害が発生し、その都度復興、再興を成し、災害対策は一步一步進化を遂げているようにも思う。しかしひとたび大災害が起これば、甚大な被害が予測される。

自然災害は地震、津波、土砂災害、火山災害、風水害、雪害などその種類も多岐にわたり、その地域の特性に根付いた対策を立てる必要がある。

平時の業務だけでも多事多難である中、災害対策にリソースを割くことは困難であり、限定的になることはやむを得ない。しかし災害を特殊な事態として避けて通るわけにはいかない。これは医師であるというよりも、地域の一住民としても必要な心構えと考える。

本特集では、総合診療医の立場から行政や民間を超えて地域を守る役に立つために、それぞれ特徴ある地域での災害対策をご紹介いただいた。

大城健一先生には昨今の災害対策の潮流をお示しいただいた。発災直後の急性期のみならず亜急性期以降までも含めて一元的に調整する本部部門(保健医療調整本部)の必要性和、災害時の対応は平時からの地域医療の延長にあること、全ての関係者が普段から少しずつ災害のことを意識することの意義を示していただいた。児玉貴光先生にはへき地、離島の特性を踏まえてご執筆いただいた。災害対応、復興の最大の要であるインフラ整備の限界と脆弱性、リスクの評価の必要性をお示しいただいた。中でも平時からプライマリ・ケア医が果たすべき役割について言及されている。河原田 恒先生には原子力発電所を有する地域として青森県の実情をお示しいただいた。“誰も食べたくない非常食”という絶妙な喩えを交え、原子力災害医療の基本から県内医療機関の役割、さらには教育を通じた将来像を描いていただいた。中俣和幸先生には火山災害について論じていただいた。現在においても火山活動の予測は困難である。火山災害に特徴的な外傷、熱傷の多発、降灰による被害と対策についてお示しいただいた。喜屋武 豊先生には沖縄における災害対策をお示しいただいた。島しょ県であるため、外部からの救助には時間を要すること。このため島外への搬送、域外への広域搬送を前提とした災害対策と自助、共助の向上をお示しいただいた。

災害対策を論じる際、最悪ばかりを想定しては思考が止まる。しかし安易な想定ばかりでは実効性がなく有事に無力である。災害の予測、評価は困難だが、災害対策を意識しなくなることが最も危ない。本特集が各地域における継続した災害対策の契機になれば幸いである。